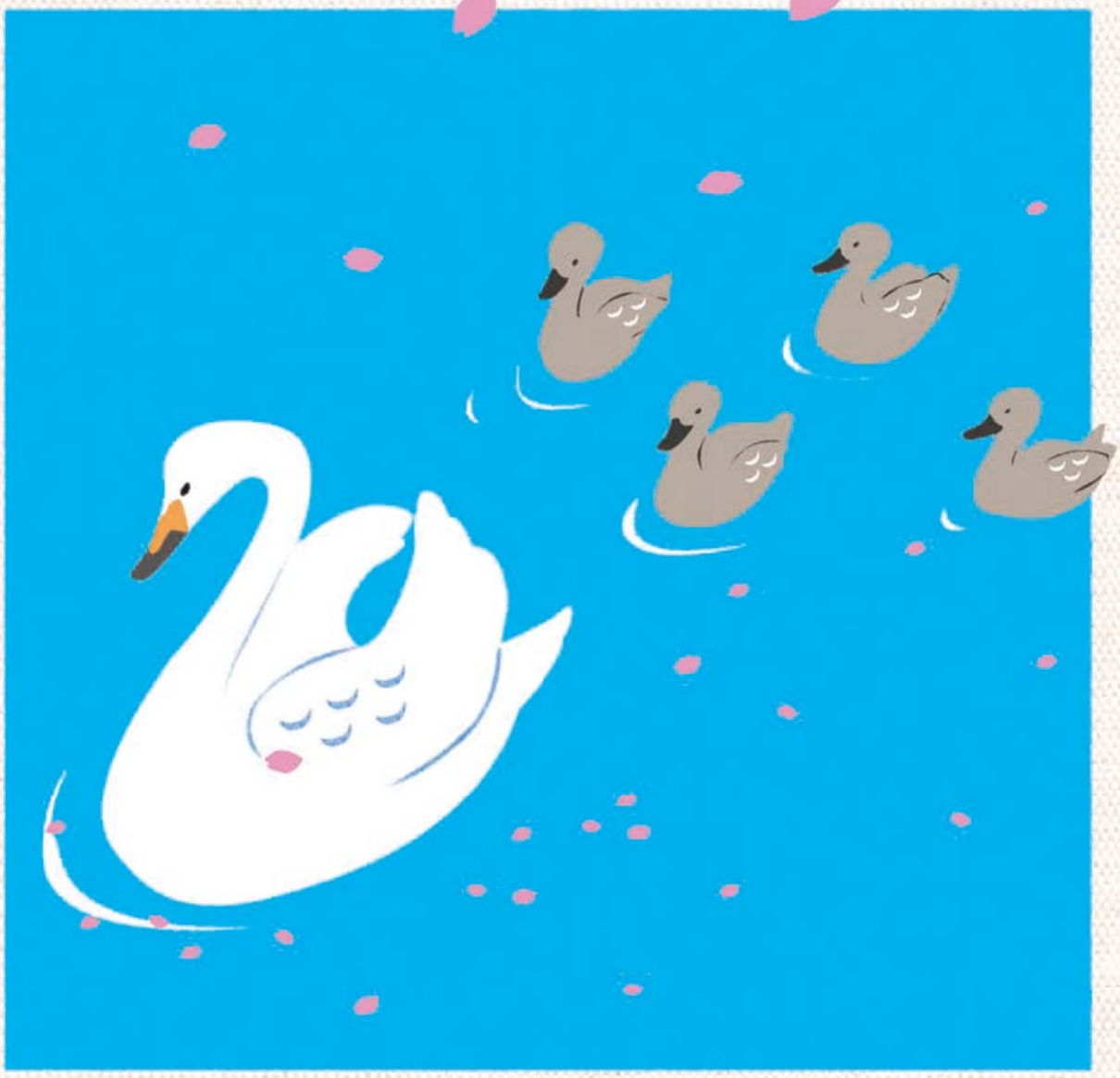
言葉の豊かな子供に育つために



石井方式・幼児からの言葉の教育のご案内

子供の無限の可能性を伸ばす教育。それが石井方式・幼児からの言葉の教育です。

「石井方式」とは

教育学者・石井 勲(いさお)博士が提唱した幼児期における言葉の教育方法です。

幼児期の早い段階から絵本などで日本語表記(漢字かな交じり文)に親しむことによって、自然に語彙(ごい)を増やし、日本語を正しく深く理解する力を育てることを目的としています。

石井方式は、幼児期の記憶の特性を活かした「適時教育」として画期的な成果を上げています。

石井 勲博士は、この指導法の樹立により平成元年、第37回菊池寛賞を受賞しています。

1 読書が好きになり、言葉が豊かになります

漢字かな交じり文に親しんで、漢字の力を身に付けた子供たちは、読書が大好きです。自分で本を読み、理解できることが嬉しいのです。そのため、自然と読書量が増え、知らない言葉をどんどん吸収していきます。たくさんの言葉の意味・使い方を知ることによって、言葉を自在に操れるようになります。それが、将来の論理的な思考や表現へとつながります。

文章を読んで理解することは、国語力の柱です。この国語力こそが、小学校へ上がってからの全ての教科の基礎となるものなのです。

2 豊かな思考力が育ちます

言葉は、具体的な意味がわかり、使い方を理解して初めて身に付きます。ひらがなで「はし」だと何のことかわかりませんが、「橋」「端」「箸」と漢字で表されると正確に意味がつかめます。

正しく言葉を理解し、その語彙(ごい)が豊富になることが、豊かな思考力につながっていきます。

3 集中力が高まります

先生が口頭で説明するだけでなく、ポイントとなる言葉・漢字を黒板に書き示したり、カードに書いて提示したりします。こうすることで子供たちは目と耳の両方から言葉を吸収していきます。そして子供たちは先生のお話をしっかりと聴き、集中できるようになるのです。

Q 幼児期から、漢字を与えるは早過ぎないですか?

A

努力いらずの幼児期にこそ

好奇心旺盛な幼児期に、具体的なイメージを表す漢字に関心を持つのは自然なこと。努力もいらず、負担にもならず、スポンジのように吸収できるのがこの時期です。一方、小学校へ上がった子供は理屈でものを覚えるようになるので、機械的に暗記するのが苦手になり、学習に苦痛を感じるようになります。

ですから、幼児期から漢字を与える方法は、早期教育でも英才教育でもなく、その時期に最も適した「適時教育」なのです。なお、幼児の手指の発育上、漢字を書くことは求めません。まずは読めれば十分なのです。

園の中で、こんなことをしています。

漢字かな交じりの日本語表記で教えます。

子供たちは言葉の数を増やし、

文字への関心が高くなり、知らず知らずのうちに、

漢字力・読書力を身に付けていきます。

1

日常と同じ環境を設定

家から一歩外に出ると、店の看板、駅名など、ひらがなだけでなく漢字もあふれています。園内をひらがなのみの空間にするのではなく、お誕生日や標語などの壁面飾りも漢字かな交じりにし、日常と同じ環境を設定することで、自然に親しんでいきます。

2

私の名前はこれです

お父様お母様が付けた名前は、たいていが漢字表記。我が子のために真剣に意味を考え深い思いを込めて付けた名前を、本来の文字で表記します。

3

かるたで楽しく言葉遊び

幼児は、かるたで遊ぶのが大好き。楽しく競い合う中で、自然に言葉を身に付けていきます。教室内に元気な「ハイ」の声が響きます。

4

絵本も漢字かな交じり

漢字かな交じり文の絵本の指導は、時間をかけて丁寧に行います。子供たち自身が声を出して読む音読を重視。読み聞かせのほか、素話カードなどの補足教材を効果的に使った指導によって、子供たちは無理なく絵本が読めるようになり、言葉が充実していきます。

先生にお聞きしました

- 言葉を覚えるには、子供であっても漢字を用いた方が覚えやすいことを知りました。子供にとって漢字を使うことは、生活の中で自然なことだと思います。
- 石井方式と初めて出会った時、難しく感じましたが、日々行う中で、「おもしろい」「次は何?」「もっと!」と、何より子供たちが楽しみました。
- 園外に「町探検」に行きます。駅や交番、学校、公園など看板を見つけると、漢字が生きた言葉へと生まれ変わる瞬間を感じ、子供たちは目を輝かせます。

躾(しつけ)にも力を入れています。

腰骨を立てて姿勢を正す、挨拶をする、返事をする、靴を揃える。躾にも積極的に取り組んでいます。